

保育内容「環境」における授業のあり方についての一考察 —学生はどのようにして「授業内の基礎的な学びからの 活用的な学び」を修得していくか—

小幡 肇*

Classroom Instruction on Environmental Education in Early Childhood: How University Students Acquire the Skills to Apply Basic Knowledge During Class

Hajime OBATA

要旨 具体的な資料に基づいて子どもの学びを探り、解明することに力を注ぐことを授業内での基礎的な学びとした。次に、子どもの学びを解明する作業を通して、実践的示唆を導出することを授業内での活用的な学びとした。本研究では、学生が授業内の基礎的な学びを実現し、活用的な学びに至る様子を検討し、保育内容C（環境）の授業のあり方を探った。そのために、ロールプレイング形式を取り入れた活動とその様子の解釈を発言し聞き合う活動の有効性に着目した授業を構想・実施した。

その結果、「観察結果とその考察を学生自らが気づき発言する」活動が生まれることにより、現場の保育士・幼稚園教諭が行っているような、実践現場の様子に即して実践現場の様子を解明する作業に近づくことが可能となる。そして、そこから、子どもの育ちを願って実践的示唆を導出することが可能となることが分かった。

キーワード：実践現場の様子の解明 実践的示唆の導出 ロールプレイング形式 発言と聞き合い

1. はじめに

無藤・塩崎¹⁾は、保育の研究動向について「実践現場の様子の解明」からの「実践的示唆の導出」、「理論的な分析」、「時事的な話題から派生する問題の解説と対応策の提案」という「相互に関連する軸で整理出来る」とした。そして、「理論や分析の抽象論に終わらせずに具体的な資料に基づかせる」ことを示唆した。

本学教育学部心理教育課程の児童心理教育コースと幼児心理教育コースの学生は、「保育内容C」において「健康」の領域と「環境」の領域を学ぶ。その授業編成は、次表の通りである。

表1 「保育内容C」の授業編成

	児童心理教育 コース学生	幼児心理教育 コース学生
第1回	オリエンテーション	
第2～8回	「環境」の領域 【小幡担当】	「健康」の領域 【高井担当】
第9～15回	「健康」の領域 【高井担当】	「環境」の領域 【小幡担当】

そこで、筆者は、上記の授業において、保育士・幼稚園教諭をめざす学生が、まず、具体的な資料に基づいて子どもの学びを探り、子どもの学びを解明することに力を注ぐことをめざした。そして、それを授業内での基礎的な学びとした。

次に、子どもの学びを解明する作業を通して、

* おばた はじめ 文教大学教育学部心理教育課程

実践的示唆を導出することができるようになることをめざした。そして、それを授業内での活用的な学びとした。

では、学生は、どのようにして授業内での基礎的な学びを実現し、授業内での活用的な学びに至るのだろうか。

そこで、本研究では、学生は、どのようにして授業内での基礎的な学びを実現し、授業内での活用的な学びに至るのかを検討する。そして、授業内での基礎的な学びを実現し、授業内での活用的な学びに至ることを可能とする「保育内容『環境』における授業のあり方」を探ることにする。

2. 感覚を多面的に刺激する演習を取り入れた授業と保育環境構成能力の形成をめざした教授法

(1) 感覚を多面的に刺激する演習を取り入れた授業

菊池²⁾は、デューイ(J. Dewey)の言説をもとに、環境を「子どもを取り巻く周囲の事物だけでなく、応答性をもった関係で成り立つ、“対象”との時・空間である」ととらえた。そして、学生が、環境を通して学ぶ保育のあり方を考えることができるには、子どもと環境が応答性をもった関係で成り立っていることに気付くことが大切であるとした。

そのため、「学生の感性が刺激されるような理論と実践」が必要であると考え、「感覚を多面的に刺激する演習」を取り入れた。そして、「理論と実践力の両方を結実させる授業」を行った。

例えば、学生(一年)が砂・水・泥とかわり「感じる感覚と、それは幼児のどのような育ちを促していくかを自分の感覚をもとに考え」させたり、紙とかわり「自分自身のどの感覚が刺激されているかを感じ」たりさせた。また、学生(二年)が桜の木や花に触れ「刺激された感覚」を手がかりにして子どもの遊びを予想し、「必要な環境の構成、援助」を考えさせた。さらに、シャボン玉遊びを通して「固形石鹸からシャボン液を作る作

業、使う道具に対するかわりなど、総合的な環境構成を考え」させたり、環境マップを作成させたりした。

(2) 保育環境構成能力の形成をめざした教授法

奥村・塩塚³⁾は、「自然に触れる演習を取り入れ、五感を働かせて自然を感じることで感性を磨くことや「発見や感動を保育に取り入れ、子どもにとって魅力ある環境づくりができる力をつける」ことに重点を置き、「保育環境の構成能力の形成を目指した教授法」を検討した。

授業のねらいは、「①子どもの環境とかわる力を育てる保育者としての資質を養うこと、②領域『環境』が自然、物、社会という環境と子どもがかわることをねらいとしていることを理解し、演習を通して学生自身がそれらに興味、関心を持ち、保育の環境作りに必要な知識をもつこと」である。

例えば、第5・6・8・9・12・13回の授業において「自然とのかかわり」を扱い、第12・13回で「フィールドビンゴ」とマップ作成を行った。そして、「自然環境に対して意識的に関わり、(略)自然を感じ、発見し、その体験を通して実際の保育を考える機会に」つなげようとした。

結果、「実際に自然に触れ、子どもの目線に立って体験的に学ぶことは自らの感性にも訴えてくるものが多数あり、保育における自然環境の必要性を学ぶ上で効果があること、(略)その体験で得た知識や感情を子どもと共有したいという気持ちが湧いてくること」を明らかにした。

また、「演習授業の内容のさらなる充実を図り、授業内での体験や学びを保育者としていかに保育環境に反映させていくのか」が課題であるとした。

3. 話し合いやロールプレイングによって学ぶ教授法

(1) 話し合いによって学ぶ教授法

早川⁴⁾は、「幼児の行為を観察することができる力の育成」が重要であるとした。そして、子どもの行為について、「学生自らが互いの話し合い

によって学び気づく」教授法を検討した。

例えば、学生が紙ヒコーキを作成し、その観察・実験を通して話し合う。そして、『興味を持つ』、『関心を持つ』、『気付く』、『親しみを持つ』という行為の後に、『考える』、『試す』、『工夫する』、『遊ぶ』、『大切に作る』、『取り入れようとする』、『喜んで参加する』このような順序が行為を能動的に引き出す関わりの中にあるのではないか」という考えを導出したという事例を報告した。

結果、早川は、「観察結果とその考察を学生自らが気づき発言することにより、『行為への気づき』が導き出され、行為への観察力を育てる」ことができるとした。

(2) ロールプレイングとディスカッションによって学ぶ教授法

小倉⁵⁾は、保育内容「表現」「言葉」の授業において『子どもに分かりやすい表現』をねらいとし、ロールプレイング形式で行う「本の読み聞かせ、ペープサート・パネルシアター、リトミックの演習」とディスカッションを取り入れた。そして、学生からのコメントとビデオをもとに検証を行い、「子どもの豊かな感性や創造性を育む必要性を受講生が理解し」たことを明らかにした。

4. 授業内での基礎的な学びと授業内での活用的な学びを実現する授業の構想

授業内での基礎的な学びを実現し、そこから授業内での活用的な学びに至る授業のあり方として、木下竹次⁶⁾の自律的学習法を基盤にした授業を構想した。それは、「木下が、『自律的学習法』を実施すると、精神の健全と作業(学習)力の発展が図られ、その心得をもって作業すればよく生を遂げることができる」と説くからである。

学生は、まず、「一人で『予備(学習の準備)・修得・応用』と作用する三段階を踏む」独自学習を歩む。次に、独自学習から得た中心問題をもとに団体にディスカッションを行う相互学習を歩む。そして、さらに進んだ独自学習を歩む。

具体的には、まず、以下のような独自学習を歩

む。第一に、子どもが環境にかかわる具体的な資料(エピソード)を探す。そして、グループ(3名構成)でエピソードに基づくロールプレイングの準備(計画・練習)に取り組む。

第二に、ロールプレイングの練習をする。そして、練習する中で気になり始めた子どもの様子についての問題意識を明確にし、ロールプレイング後に提起する準備を行う。

次に、以下のような相互学習を歩む。第三に、保育内容Cにおいてロールプレイングを実施し、気になり始めた子どもの様子を問題提起する。そして、それぞれの解釈を発言し聞き合う活動を通して、子どもの行為を観察する感性や力を磨く。

さらに、以下のような独自学習を歩む。第四に、聞き合った解釈を手がかりにして、自力でロールプレイングの場面(実践現場)の様子を解明し、そこから実践的示唆を導出する作業に取り組む。そして、ワークシート(環境構成・予想される幼児の活動・保育者のかかわり)に整理し、授業内での基礎的な学びとする。

第五に、授業内での基礎的な学びを、自分なりに俯瞰・省察して文章化し、授業内での活用的な学びとする。

上記のような独自学習・相互学習・独自学習をつみかさね、具体的な資料(実践現場での子どもの様子)を通して子どもの学びを探り、子どもの学びを解明することができるようにする、そして、子どもの学びを解明することによって、自らの実践的示唆を導出することができるようにする。

5. 「環境」の領域の授業の概要

保育内容Cのねらいは、乳幼児理解、保育及び教育課程の理解に基づき、「①当該領域のねらいと内容を理解すること、②乳幼児の心身の発達の特徴を理解すること、③幼児教育の基本である『遊び』を通じた全人的成長を理解すること、④乳幼児の発達の特徴を踏まえた遊びと学びの指導、生活習慣の指導を理解すること、⑤教育課程・保育課程を踏まえた指導計画を立案し、実践するとと

もに省察すること、を身につけること」である。

そして、「他者の発表を通じて自己の学びとし、また自己の発表を通じて得た省察を踏まえ、以後の保育者への成長の糧とする」協同的な学びの修得を求める。

「環境」の領域は、以下のような授業を実施した。

表2 「環境」の領域の授業

第1回	オリエンテーション 環境にかかわる子どもの具体的な資料に基づいたエピソードを探ること、それをういたロールプレイングを準備・実施すること、気になり始めた子どもの様子についての問題提起をし、それぞれの解釈を発言し、聞き合う活動を行うことを示す
第2回	児童心理教育コース学生がローププレイングの相談・準備を行う
第3～8回	児童心理教育コース学生によるローププレイングと話し合いを行う
第9回	幼児心理教育コース学生がローププレイングの相談・準備を行う
第10～15回	幼児心理教育コース学生によるローププレイングと話し合いを行う

6. 幼児心理教育コースの学生の学び

(第10回)

(1) 子どもの様子の読み取りに対する事前調査

本研究では、保育士・幼稚園教諭をめざす幼児心理教育コース学生(第9～15回)が取り組んだ授業の様子を取り上げ、学生の学びを検討する。

そこで、学生が、環境とかかわる子どもの様子を写した写真(向かい合って人差し指と手のひらを使って思いを伝え合う2人の子ども)を見て、どのように子どもの様子を読み取るかを記述式で調査した(第9回)。

学生①「見てー。今日畑でみたさつまいもの芽、こんな感じだったよねー」

「本当だ！これからもっと大きくなるかな？ あ、じゃあ私太陽になる。キラキラ」 「ニョキニョキ」

学生②<遊具の上で虫をみつけた>

「あれ！何かいる！」 「見せて見せてー」 「これ〇〇って言うんだよ」「すごい！

もっと探そう」

<遊具でどちらが先に遊ぶか決めている>

「ぼくが先に遊ぶの」「じゃあジャンケンで決めよう」「いいよ」「ジャンケンポーン！」

<影で遊んでいる>

「あ！みて！かたつむりみたい！」 「ほんどだ！！おもしろいねえ！」 「他になにができるかなー？」 影で遊び続ける

学生②<左：年上、右：年下>

「見て！おとうさん指におとうさんの絵を描いたんだ！！」「本当だ！すごい！！わたし(ぼく)にも描いてー！」

<遊具を登り終えて>

「登ったら手に砂が付いちゃった(笑)」 「みせてみせて！砂が付いてるー(笑)」

<指を見せて>

「わたしの手ね。魔法の手だから指が4本なの」「魔法使えるの！？やってみてー！！」

学生①のように、生き物に触ろうとしている、指で表現しようとしている、手で形を作り演じている、と読み取った学生が7名(45名中)いた。

学生②のように、ジャンケンや指を何かに見立てて遊んでいると、読み取った学生が32名(45名中)いた。手を振って合図している、ハイタッチをしていると、読み取った学生が6名(45名中)いた。指で影をして遊んでいる、登り棒を握ったと、読み取った学生が5名(45名中)いた。

結果、学生は、環境とかかわる中で想像を楽しむ子どもの姿、遊具をめぐる人間関係やコミュニケーション、遊ぶ中での気付き等に着眼することが分かった。

また、子どもの様子に対する自分なりの解釈を考えたり、実践現場の様子を解明したり、実践的示唆を導出したたりする学生は、ほほいないということも分かった。

以上のことから、保育士・幼稚園教諭をめざす学生が、子どもの様子に対する自分なりの解釈を

考えたり、実践現場の様子を解明したり、実践的示唆を導出したりすることを身に付ける経験をつむ意義を確認することができる。

(2) 第10回(1回目)の授業の概要

第10回は、最初に、①班がロールプレイング「ウサギの飼育(5歳春)」を行った。そして、問題提起「無理に餌を食べさせようとする子どもの様子」を受け、それぞれの解釈を発言し聞き合った(15分)。聞き合った解釈を手がかりにして、自力でロールプレイングの場面(実践現場)の様子を解明し、そこから実践的示唆を導出する作業に取り組んだ。その後、ワークシート(環境構成・幼児の活動・保育者のかかわり)に整理し、授業内での基礎的な学びとした(10分)。

次に、②班がロールプレイング「公園の思い出のちぎり絵制作(5歳6月)」を行った。そして、問題提起「途中で投げ出す子どもの様子」を受け、それぞれの解釈を発言し聞き合った(15分)。聞き合った解釈を手がかりにして、自力でロールプレイングの場面(実践現場)の様子を解明し、そこから実践的示唆を導出する作業に取り組んだ。その後、ワークシート(環境構成・幼児の活動・保育者のかかわり)に整理し、授業内での基礎的な学びとした(10分)。

さらに、③班がロールプレイング「外遊びをする前に着替える(4歳6月)」を行った。そして、問題提起「着替えが進まない子どもの様子」を受け、それぞれの解釈を発言し聞き合った(15分)。聞き合った解釈を手がかりにして、自力でロールプレイングの場面(実践現場)の様子を解明し、そこから実践的示唆を導出する作業に取り組んだ。その後、ワークシート(環境構成・幼児の活動・保育者のかかわり)に整理し、授業内での基礎的な学びとした(10分)。

最後に、3つの授業内での基礎的な学びを、自分なりに俯瞰・省察して文章化し、授業内での活用的な学びとした(15分)。

(3) 第10回(1回目)の学生Aの学び

①班は、ロールプレイング「ウサギの飼育当番

(5歳春)」と餌を無理に食べさせようとする子どもの様子の問題提起した。

それぞれの解釈を発言し聞き合った後、学生Aは、環境構成(ウサギ小屋や水道の場所等の園庭図)、場面のねらい「友達(ウサギ)に自分の気持ちを言葉で伝えようとするようにする。生き物に親しむ」、経験をつませたい内容「餌やりを通して言葉の通じない動物の気持ちを考える」を設定した。

次に、主活動「動物に餌をあげようとする」を設定した。そして、その場面における子どもの様子について、「餌を食べないウサギを見て、餌をウサギの口の近くに持っていく工夫をしたり、『餌だよ』と声をかけたりする」、「工夫がうまくいかず、悲しい気持ちになったり怒ったりする」と解明し、記入した。また、その後の主活動として、「教師と話をしてウサギの気持ちについて考える」ことを構想した。

さらに、保育者のかかわりとして、「子どもが餌をあげようと工夫する姿を観察する」を設定した。そして、具体的に、「子どもの餌を食べさせようとした子どもの気持ちと共感し、くみ取りつつ、ウサギがどういう気持ちだったかを考えられるよう、相手の立場に立って『自分が同じようにされたらどんな気持ち?』と声をかける」という実践的示唆を導出した。

資料1 ①班のロールプレイングをもとにした学生Aのワークシート

ねらいと内容 (経験させたい内容) ねらい: 友達(ウサギ)に自分の気持ちを言葉で伝えようとするようにする。生き物に親しむ。 内容: 餌やりを通して言葉の通じない動物の気持ちを考える。		
環境構成	予想される幼児の活動	保育者のかかわり
(活動の前段・省略)	(活動の前段・省略)	(活動の前段・省略)
餌 道具 水道 園庭図	・動物に餌をあげようとする。 ・餌を食べないウサギを見ても、餌をあげようとする。 ・ウサギの口の近くに餌を持っていく工夫をする。 ・「餌だよ」と声をかけたりする。 ・工夫がうまくいかず、悲しい気持ちになったり怒ったりする。 ・教師と話をしてウサギの気持ちについて考える。	・子どもの餌をあげようとする姿を観察する。 ・子どもの餌を食べさせようとした子どもの気持ちと共感し、くみ取りつつ、ウサギがどういう気持ちだったかを考えられるよう、相手の立場に立って「自分が同じようにされたらどんな気持ち?」と声をかける。

②班は、ロールプレイング「公園へ行った思い出のちぎり絵制作(5歳6月)」と途中でやめる子

学生Aは、『『環境』のねらいを含めた『ねらいと内容』を考えるのは難しく、最初の2つの班のロールプレイングでは『環境』ねらいを含めた『ねらいと内容』を考えることができました。最後の班は『環境』を意識して『ねらいと内容』を考えることができませんでした。『泥だんごをやるから着替えよう』と声をかけるのも良いけれど、泥遊びの嫌いな子への声かけは他を考えなければいけないので、さまざまな子のことを考えて『環境』のねらいを含めた『ねらいと内容』を考えられると良いと思いました。『今回のロールプレイングを見て、ロールプレイングは、ある場面の1シーンなので、さまざまな子どもの性格やその時の状況、環境を考えて、いろいろな面を意識して書いていくことが大切だと思いました』と俯瞰・省察した。

資料4 学生Aの学び

① 環境のねらいを含めた「ねらいと内容」を考えるのは難しく、最初の2つの班のロールプレイングでは「環境のねらいを含めた「ねらいと内容」を考えることができました。最後の3つの班はあまり環境を意識して「ねらいと内容」を考えることができませんでした。『泥だんごをやるから着替えよう』と声をかけるのも良いけれど、泥遊びの嫌いな子への声かけは他を考えなければいけないので、様々な子のことを考えて「環境」のねらいを含めた「ねらいと内容」を考えられると良いと思いました。

② 今回のロールプレイングを見て、ロールプレイングは、ある場面の1シーンなので、様々な子どもの性格やその時の状況、環境を考えて、色々な面を意識して書いていくことが大切だと思いました。

学生Aが『『環境』を意識して『ねらいと内容』を考えることができなかつた』と俯瞰・省察したことは、子どもが環境とかかわることを通して、どのようなことを学んでいるかを探ることができなかつたということである。

では、なぜ子どもが環境とかかわることを通して、どのようなことを学んでいるかを探ることができなかつたのか。

それは、環境にかかわる具体的な資料(エピソード)を探す際の学生の意識が、実習生として対応に困るような問題場面(無理に餌を食べさせようとする子ども、途中で投げ出す子ども、着替えが進まない子ども等)とその対応に眼が向いていた

からである。そのため、実習生として対応に困るような問題提起に、聴衆者としての学生も共感したのである。

そこで、このことは、学生の、実践現場における子どもの動きや気付き等を観察することに対する学びや知見が弱いことに帰着すると考えた。

7. 授業改善を図る

第10回(1回目)の授業結果を受け、授業改善を図ることにした。幼児心理教育コースの学生は、すでに保育所実習を経験済み、もしくは現在実習中である。

そこで、第11回(2回目)以降の授業では、環境にかかわる具体的な資料(エピソード)を探す際の学生の意識が、実習生として対応に困るような問題場面から子どもが環境とかかわることを通して学んでいることを探ることに向くような間接的指導を考えた。それは、前述した木下の『自律的学習法』を拠り所としたからである。つまり、間接的指導を通して、学生が語ることによって自力で子どもが環境とかかわることを通して学んでいることを探る意義を学ぶことができると考えたからである。

そのため、ロールプレイングを通じた問題提起について解釈を発言し聞き合った後、学生が見落としていること、つまり環境とかかわる子どもの学びを、筆者が拾い出して話題として据えることにした。

また、それに関連して、実習を終えた学生から実践現場で見かけた同様の場面での子どもの動きや気付き等の情報を披露させることに重点を置くことにした。

8. その後の幼児心理教育コースの学生の学び(第13回)

(1) ⑩班ロールプレイングをもとにした学生Bの学び

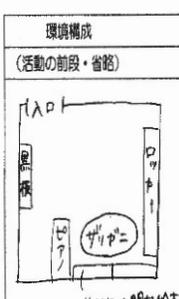
間接的指導による授業改善の結果、第13回(4回目)⑩⑫班は、実習中に見かけたエピソードを

使ったロールプレイングを行った。(⑩班は実習生として困る場面を取り上げたロールプレイング)⑩班は、実習中に見かけたエピソードを使ったロールプレイング「ザリガニの飼育(5歳6月)」とザリガニの世話を通してつぶやき合う子どもの様子を問題提起した。

それぞれの解釈を発言し聞き合う際、⑩班から実習中に見かけたエピソードの補説を行ったことにより、聴衆者である学生が実習中に見かけた同様の場面の様子を付け加えた。

つまり、学生自らが、実践現場における子どもの動きや気付き等を観察したことを持ち込んだのである。このような行動が身に付くことによって、早川が指摘した「観察結果とその考察を学生自らが気づき発言することにより、『行為への気づき』が導き出され、行為への観察力」が育つことにつながると考える。

資料5 ⑩班のロールプレイングをもとにした学生Bのワークシート

ねらいと内容 (経験させたい内容)		
生き物に餌合わせの関心を向ける 飼育の仕方を工夫しながら生命の大切さを伝える		
環境構成	予想される幼児の活動	保育者の関わり
(活動の前段・省略)	(活動の前段・省略)	(活動の前段・省略)
	◎自由あそび ・AさんとBさんがザリガニを観察している ・ザリガニの足が切れているのに気づき、どうしてなのか疑問をもつ ・ザリガニのこびとを、子ども達と一緒に考えて「どうすればいいかな?」 ・「解決方法があるよ」という方法を考える	・AさんとBさんが観察しているのに対して、より生き物への興味・関心が広がるような声かけをする。「今、何しているのかな?」 ・子ども達の気づきに対して、一緒に考えて「どうすればいいかな?」 ・「みんなが話し合えばいいよ」という解決方法を提示する

それを受けた、学生Bは、環境構成(ザリガニや生き物に関する絵本を配置した図)、場面のねらい「生き物に触れ合い、関心を向ける」、経験をつませたい内容「飼育の仕方を工夫しながら生命の大切さを知る」を設定した。

そして、その場面における子どもの様子について、「AさんとBくんがザリガニを観察している」、「ザリガニの足が切れているのに気づき、どうしてなのか、疑問をもつ」、「ザリガニのことを考え、子どもたちで解決する方法を考える」、「病院をつ

くる」と、問題発見・解決の過程の育ちにつながる、具体的かつ創造的な思考を解明し、記入した。

保育者の具体的ななかかわりとして、「AくんとBくんが観察しているのに対して、より生き物への興味・関心が広がるような声かけをする」、「『今、何しているのかな?』」、「子どもたちの気付きに対して、一緒に考えて『どうすればいいかな?』『みんながけがをしたとき、どうする?』など解決方法を見つけられるようにする」と、問題発見・解決の力が育つことを願って、具体的かつ創造的な思考を育てる実践的示唆を導出した。

(2) ⑩班ロールプレイングをもとにした学生Cの学び

資料6 ⑩班のロールプレイングをもとにした学生Cのワークシート

ねらいと内容 (経験させたい内容)		
・「生き物の世話を学ぶ」経験を「生き物に関心を向ける」を設定した		
環境構成	予想される幼児の活動	保育者の関わり
(活動の前段・省略)	(活動の前段・省略)	(活動の前段・省略)
	・ザリガニを観に来る子がいる ・餌をあげたがる子がいる ・図鑑で知った知識を保護者や友だちに話す姿が見られる ・「ザリガニは暗い所が好きってかいてあったよ」 ・「様子を見ていてケガをしているザリガニがいるのをみつける子がいる」 ・「先生、なんか歩き方が変なのがいる」と、多様な視点から見つめる子どもの様子や既知の知識を友だちに披露する子どもの様子を解明し、記入した	・「みんなが話し合えばいいよ」という解決方法を提示する

学生Cは、同場面のねらい「生き物の世話を学ぶ」、経験をつませたい内容「生き物に関心を向ける」を設定した。

そして、その場面における子どもの様子について、「ザリガニを見に来る子がいる」、「餌をあげたがる子がいる」、「図鑑で知った知識を保護者や友だちに話す姿が見られる『ザリガニは暗い所が好きってかいてあったよ』」、「様子を見ていてケガをしているザリガニがいるのをみつける子がいる」、「先生、なんか歩き方が変なのがいる」と、多様な視点から見つめる子どもの様子や既知の知識を友だちに披露する子どもの様子を解明し、記入した。

保育者の具体的ななかかわりとして、「餌を皆で

少しずつ与えられるよう配りながら観察する」, 「『そうなんだね, どうしたら暗い所できると思う? 作ってあげられる?』と子どもの意見を聞きながら生き物のすごしやすい環境を作る経験ができるよう手助けをする」, 「『よくみつけたね, どうして変な歩き方してるんだろうね?』と理由や対処を考えられるような声かけをする」と, 経験をつませたい内容や理由や根拠をもって話すことができる力が育つことを願って, 具体的かつ多様な面から言葉かけを工夫する実践的示唆を導出した。

(3) ⑫班ロールプレイングをもとにした学生Bの学び

資料7 ⑫班のロールプレイングをもとにした学生Bのワークシート

ねらいと内容 (経験させたい内容)	環境構成	予想される幼児の活動 (活動の前段・省略)	保育者の関わり (活動の前段・省略)
① 虫かごを使って拡大して色々な虫を見ることが出来る ② 虫かごの正しい使い方を知り, 安全に使う ③ 自然や生き物に興味・関心をもつ		① 自由あそび(観察) ・ 虫かごがあることに気づき, 虫かごの手を取り, サナギを観察し, 思い思いに話している。 ・ 虫かごの注目を集めるように, 電気を足らぬように話している。 ・ 虫かごを使って拡大して色々な虫を観察する。	・ あらかじめ設定した虫かごコーナーに子ども達が気づき観察するにつれ, 自然や生き物に興味・関心を促すよう声かけをする。 ・ 虫かごを安全に使用できるように, 正しい使い方の確認をし, 約束を決める。 ・ 子ども達の疑問や気づきに対しては, 一緒に考えることを大切にしている。

⑫班は, 実習中に見かけたエピソードを使ったロールプレイング「虫眼鏡で観察する(4歳春)」と虫眼鏡で太陽を見てはいけないことへ疑問をもつ子どもの様子を問題提起した。

それぞれの解釈を発言し聞き合う際, ⑫班から実習中に見かけたエピソードの補説を行ったことにより, 他の班の学生が実習中に見かけた同様の場面の様子を付け加えた。

それを受けた, 学生Bは, 環境構成(生き物の本コーナー, サナギの入った虫かご, 虫眼鏡の配置図), 場面のねらい「虫眼鏡を使って拡大していろいろな物を見ることの楽しさを味わう」, 経験をつませたい内容「虫眼鏡の正しい使い方を知り安全に使う, 自然や生き物に興味・関心をもつ」を設定した。

そして, その場面における子どもの様子について, 「虫コーナーがあることに気づき, 虫眼鏡を手に取り, サナギを観察して思い思いに話している」, 「虫眼鏡の注意点を先生から聞き, 電気は見てもよいのか疑問が出てくる」, 「虫眼鏡を使って拡大して見ることの楽しさからいろいろな物を観察する」と, 問題発見・解決の過程の育ちにつながる, 具体的かつ創造的な思考を解明し, 記入した。

保育者の具体的なかかわりとして, 「あらかじめ設定した虫コーナーに子ども達が気づき, 観察するのに対し, 自然や生き物に興味・関心を含ませるよう声かけをする」, 「虫眼鏡を安全に使えるように皆で使い方を確認し, 約束を決める」, 「子ども達の疑問や気づきに対してはしっかりと対応し, 一緒に考えることを大切にしている」と, 問題発見・解決の力が育つことを願って, 具体的かつ創造的な思考を育てる実践的示唆を導出した。

(4) 第13回(4回目)の学生BやCの学びの検討では, 学生BやCは, 授業内での基礎的な学びを, 自分なりに俯瞰・省察して文章化することを通して, どのような授業内での活用的な学びに至ったのだろうか。

資料8 学生Bの学び

- ① 今日は生き物との関わり方のロールプレイングがあり, 自然や生き物への触れ合いの機会や興味・関心をもてるように保育者として設定することが大切だと思った。
- ② 子どもがもった疑問に対して, 一緒に考え反応を返してあげること, 子どもが学びや興味を広がるのだと思った。また, 一緒に経験や体験をすることで疑問の答えを知っていくことが出来る環境はとてとても良い環境に思っていた。

学生Bは, 「今日は自然や生き物への触れ合いの機会や興味・関心をもてるように保育者として設定することが大切だと思った」, 「子どもがもった疑問に対して, 一緒に考え反応を返してあげること, 子どもが学びや興味を広がるのだと思った。また, 一緒に経験や体験をすることで疑問の答えを知っていくことができる環境はとてとても良い

なと思った。道具1つ取り入れただけで、たくさんの学びや興味・関心を広げることができるので、同じ環境でも全然違う環境にすることができて良いなと思った」と、俯瞰・省察した。

資料9 学生Cの学び

子どもの予想される自然との関わりとその時の保育者の関わりは、今まで想定内のものが多かったけど、電気はだめなの?のような想定外の質問も、現場では当然出てくると思うので、そういう時にどうしたら子どもと一緒に分かりやすく学んでいけるか考えて保育を行っていきたいと思いました」と、俯瞰・省察した。

学生Cは、「子どもの予想される自然との関わりとその時の保育者の関わりは、今まで想定内のものが多かったけど、電気はだめなの?のような想定外の質問も、現場では当然出てくると思うので、そういう時にどうしたら子どもと一緒に分かりやすく学んでいけるか考えて保育を行っていきたいと思いました」と、俯瞰・省察した。

他に、学生Dは、「環境に対して幼児がどのようなことを見つけ、何を思うのか知るために子どもの声だけでなく、同じ目線で物を見ることが大切だと思いました。また、ねらいから外れた子どもの気づきも拾って話題にすることも学びにつながったり、先生の新しい発見につながったりするのではないかと感じました」、「ロールプレイングの題材よりも、その中の子どもの動きや気づきを予め考え、準備をしたり、子どもたちの発想や遊びを広げていける環境構成や声かけが考えられるようになればいいと思いました」と、俯瞰・省察した。

学生Eは、「今までねらいと内容に対して1つの年齢でしか考えていなかったけれど、3歳ではどうか、5歳ではどのように遊びを展開していこうかと年齢にそった遊びの仕方を考え、より発達を意識したものにする」、「ロールプレイングを見て不思議に思ったり発見したことは書いておいて、実習時に問いかけられるようにしたい」と、俯瞰・省察した。

学生Fは、「今日は、その後の活動にどのような影響があるか考えてみました。特に、最後の虫眼鏡を使った場面では、その後の活動でも虫眼鏡を使いたがる姿が容易に想像できました。他にどんな姿が思いつくか、他の人の考えが気になりました。

授業で何回か書いていくうちに『環境構成』等を書くことに慣れてきました。何度も書くことの大切さを感じました」と、俯瞰・省察した。

⑩⑫班が、実習中に見かけたエピソードを使ったロールプレイングとそこから抽出した子どもの様子に対する問題提起を行ったことにより、同様の場面を見かけた学生自らが、「観察結果とその考察を学生自らが気づき発言する」活動が生まれた。

そして、現場の保育士・幼稚園教諭が行っているような、実践現場の様子に即して実践現場の様子を解明する作業に近づくことが可能となった。

結果、問題発見・解決の過程の育ちにつながる、具体的かつ創造的な思考を解明し、問題発見・解決の力が育つことを願って、具体的かつ創造的な思考を育てる実践的示唆を導出することができた。

また、多様な視点から見つめる子どもの様子や既存の知識を友だちに披露する子どもの様子を解明し、経験をつませたい内容や理由や根拠をもって話すことができる力が育つことを願って、具体的かつ多様な面から言葉かけを工夫する実践的示唆を導出することができた。

つまり、授業において、「観察結果とその考察を学生自らが気づき発言する」活動が生まれることにより、現場の保育士・幼稚園教諭が行っているような、実践現場の様子に即して実践現場の様子を解明する作業に近づくことが可能となる。そして、そこから、子どもの育ちを願って実践的示唆を導出することが可能となると分かった。

結果、そのような授業内での基礎的な学びを実現し、授業内での活用的な学びに至ることにより、保育士・幼稚園教諭をめざす学生が、次の3点の

ようなことを学んでいくことが分かった。

第一点、自然や生き物への触れ合いの機会を保育者が設定することの意味、疑問を一緒に考え反応を返す関わりが幼児の学びや興味を広げるといふ意義と環境としての保育者の役割、学びや興味・関心の広がり生まれる環境構成の工夫。

第二点、実践現場の様子を解明にいつそう目が向くようになり、想定外の出来事を一緒に考えて保育を行うといった保育観、環境とかわる幼児と同じ目線で物を見るといった指導観、ねらいから外れた子どもの気づきも話題にすることから生まれる学びや保育者の新しい発見といった指導観、幼児の動きや気づきを予め考えて準備をし、幼児の発想や遊びを広げていける環境構成や声かけを考えるといった方法観。

第三点、年齢にそった遊びの仕方や発達を意識した保育のあり方、そのための保育者としての技術の高め方、その後の活動への影響を視野に入れて他の保育者との協働的な作業や自身で書くことを通して、自身の保育者としての力量形成を図る道筋。

9. まとめと今後の課題

学生は、環境とかわる子どものエピソードを収集する際、実践現場における子どもの動きや気付き等を観察することに対する学びや知見が弱いため、実習生として対応に困るような行動をとる子どもの様子に眼が向きがちとなる。そして、問題行動をとる子どもの内面やその対応に困らない指導のありようを身に付けることを授業内での学びとして求める。

そこで、「保育内容『環境』における授業」において、以下のような取り組みを行うことにより、具体的な資料に基づいて子どもの学びを探り、子どもの学びを解明することに力を注ぐことをめざした、授業内での基礎的な学びが実現する。そして、子どもの学びを解明する作業を通して、実践的示唆を導出することができるようになることをめざした、授業内での活用的な学びに至る授業が

可能となる。

- ① 問題発見・解決の過程の育ちにつながる、具体的かつ創造的な思考を解明に眼が向くようなエピソードをもとに、ロールプレイングを行い、そこから抽出した問題提起について、解釈を発言し聞き合う活動を取り入れる
- ② 解釈を発言し聞き合った後、学生が見落としていること、つまり環境とかわる子どもの学びを、拾い出して話題として据える
- ③ それに関連して、実習を終えた学生から実践現場で見かけた同様の場面での子どもの動きや気付き等の情報を披露させることに重点を置く
- ④ 実習を通して見かけた様子を、学生自らが「観察結果とその考察を学生自らが気づき発言する」ことを身に付けさせることにより、具体的な資料に基づいて子どもの学びを探り、子どもの学びを解明することに力を注ぐ、授業内での基礎的な学びの実現を図る
- ⑤ ④のような、現場の保育士・幼稚園教諭が行っている、実践現場の様子に即して実践現場の様子を解明する作業に近づくことにより、問題発見・解決の過程の育ちにつながる、具体的かつ創造的な思考を解明し、問題発見・解決の力が育つことを願って、具体的かつ創造的な思考を育てることへの実践的示唆を導出することができるようにする。

また、多様な視点から見つめる子どもの様子や既知の知識を友だちに披露する子どもの様子を解明し、経験をつませたい内容や理由や根拠をもって話すことができる力が育つことを願って、具体的かつ多様な面から言葉かけを工夫することへの実践的示唆を導出することができるようになる

つまり、授業において、「観察結果とその考察を学生自らが気づき発言する」活動が生まれることにより、現場の保育士・幼稚園教諭が行っているような、実践現場の様子に即して実践現場の様子を解明する作業に近づくことが可能となる。そ

して、そこから、子どもの育ちを願って実践的示唆を導出することが可能となることが分かった。

また、そのような授業内での基礎的な学びを実現し、授業内での活用的な学びに至ることにより、保育者が環境を設定する意味と工夫、保育者の関わりの意義と役割、保育観や指導観や方法観、保育のあり方と技術の高め方、自身の保育者としての力量形成を図る道筋等を考える機会となることが分かった。

しかし、本研究では、子どもの問題発見・解決につながる要素を含むロールプレイング以外にどのような要素を含むロールプレイングが行われたのか、どのような子どもの様子が問題提起されたのか等について触れることができなかった。そして、どのような解釈の聞き合いがあったのか、検討することができなかった。

また、教師は、学生の基礎的な学びが実現し、授業内での活用的な学びに至るために、どのような準備をしたり、どのような授業中の関わりを行ったりしたのか等を加えて、総合的に検討することができなかった。

そこで、本研究を基礎的研究として、今後、上記の点についての検討・省察を行うことが残された課題である。

2016年, pp21-28

- 6) 木下竹次『学習原論』目黒書店, 1923年, pp1-15
木下竹次『学習原論』明治図書, (「世界教育学選集」)
1972年, pp13-21

-
- 1) 無藤隆・塩塚京子「乳幼児保育・幼児教育の研究の動向と実践の課題」『子ども社会研究』日本子ども社会学会, 第11巻, 2005年, p130
 - 2) 菊池恵「保育内容『環境』の授業実践記録を通しての一考察」『聖園学園短期大学研究紀要』第37巻, 2007年, pp74-76
 - 3) 奥村典子・塩塚亜希子「保育者養成課程における領域『環境』の教授法の検討」『関東学園研究紀要』第20号, 2012年, pp47-54
 - 4) 早川礎子「保育士養成校における保育内容(環境)の授業研究」『日本教育学会大会研究発表要綱』74巻, 2015年, pp350-351
 - 5) 小倉隆一郎「保育内容『表現』および『言語』におけるオペレッタの実践—子どもに分かりやすい表現をめざして—」『文教大学教育学部紀要』50集,